

YAMANASHI
DISCOVERY
MAGAZINE

VOL.
10

2018
SPRING

山梨

てて
teku-teku
くく



| 特集 |

伝統と革新が織りなす
美しき印伝

山梨

てて
Teku-Teku
くく



『山梨てくてく』は
歩く速さでじっくりと

山梨の魅力を紹介していきます。

日本に古くから根付いていた鹿革の加工品。

それが山梨の職人たちの創意工夫と豊かな感性によって、

江戸時代には『印伝』という

一つのブランドとして花開いていきました。

今回は『印伝』の歴史と、職人の技と誇りに触れながら、

甲府のまちを中心に『てくてく』。

こんな山梨があったんだ、と思える発見や感動を

見つけていただけたらと思います。

CONTENTS

VOL. 10

特集 | 伝統と革新が織りなす
美しき印伝

03 印伝の歴史

08 印伝を世界へ。

老舗が守る伝統と、挑み続ける革新

10 印伝は誇り。

新しい印伝を探索する
若き伝統工芸士の挑戦

「てくてく」食

12 地元産の食材と、印伝風の化粧箱。
山梨の歴史文化を兼ね備えた銘菓。

「てくてく」住

14 地元の天然素材から生まれる
革小物の世界

「てくてく」甲斐の国

16 金手駅

印伝の歴史

職人の熱意と、粹を好んだ文化の証し

山梨に100年以上もの昔から伝わる革工芸「印伝」。

鹿革に漆で模様を付けたものが特徴で、

巾着などの袋物はその始まりといわれている。

日本に根付いた鹿革の加工技術は、
やがて「**印伝**」という、
一つのブランドとなった

鹿革は軽くて丈夫であり、素材として手に入りやすかったため、日本では古くからさまざまな実用品の製作に用いられてきました。中でも、奈良時代に燻べ技法で作られた文箱(国宝・東大寺蔵)はよく知られています。また、柔らかく体になじむ上、強度もあるので戦国時代には、武将たちの武器・鎧や兜などに広く用いられていました。このように鹿革の加工技術は長い歴史の流れの中で育まれていったのです。この鹿革の加工品が、いつ、どうして「印伝」と呼ばれるようになったの

革羽織の多くは燻べ技法が施されている。写真は甲州財閥・若尾家に伝わる山市印燻革羽織
[印傳博物館蔵]



燻革合切袋(右)・三ツ巻財布(中)・提げ箕入れ(左) [印傳博物館蔵]



印傳屋の記載がある「甲府買物独案内」(江戸時代)
[印傳博物館蔵]



信玄袋(右・中)と巾着(左) [印傳博物館蔵]

かつて全国的に普及していた鹿革の加工品が、伝統工芸品「印伝」として山梨県の地場産業となったのは、甲府市の老舗「印傳屋」の遠祖・上原勇七が鹿革に漆で模様を付ける独自の技法を創案したことに始まります。最初は撥水効果を目的として塗られるようになった漆。漆のひび割れによる表情から地割れ印伝、松皮印伝とも呼ばれました。しかし、撥水効果にとどまらず、漆で美しい模様を付ける技法を生み出し、江戸小紋などの絵柄を漆で表現した印伝は、たちまち人気を博しました。江戸時代中期以降は庶民の旅も盛んになり、粋を競う人々の中で巾着、箕入れなどが愛用品として定着していったのです。

山梨は鹿皮と漆が産出される好条件がそろっていたことで、産地として栄えていったのですが、太平洋戦争で印伝の製造は一時中止を余儀なくされました。しかし焦土と化した甲府の地から力強く再興し、今日に至っているのです。

山梨の印伝産業は、 繊細な技と豊かな感性から生まれた

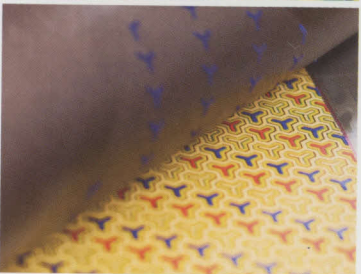
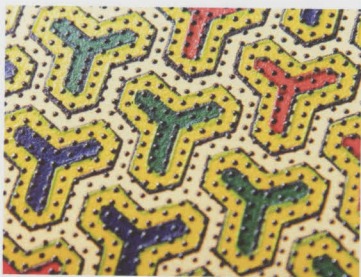
かは定かではなく、インドアの変化した言葉とも、印度伝来に由来するといわれるなど諸説があります。江戸時代にベストセラーとなった十返舎一九の『東海道中膝栗毛』に「腰にさげたる印伝の巾着を出し見せる」の一節があることから、そのころには印伝という呼び名が知られていたことがうかがえます。

国の伝統的工芸品に指定。
産地としての誇りを胸に未来を描く

昭和49年には甲府印伝商工業協同組合が設立され、業界の発展へ向けた情報交換や、伝統の技の継承と、さらなる向上を目指す取り組みが推進されるようになりました。その後、洋装に合わせたハンドバッグなども生産。ファッションの多様化にマッチする製品の開発も活発に行われ、印伝はさらに人々から愛される存在に成長していきましました。こうして山梨は印伝の産地として揺るぎない地位を確立し、昭和62年には国の「伝統的工芸品 甲州印伝」に指定されました。現在は海外でも高い評価を受けるなど、山梨発の美しい印伝文化は新しい時代の幕開けを迎えています。

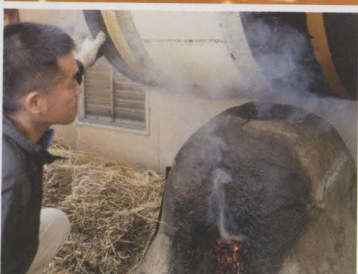


受け継がれる印伝の技法



さら
更紗

模様の色ごとに型紙を替え、多色使いの模様が表現できる技法。漆ではなく顔料を使用することで鮮やかな多色模様ができる。色が多いほど型紙の枚数が増えるが、美しい仕上がりのためには少しのズレも許されない。正確かつ均一に色を載せる高度な技術が必要。印度伝来の更紗模様に似ていることが、その名の由来といわれている。



ふす
燻べ

太鼓と呼ばれる筒に鹿革を張り、わらをたいていぶし、茶褐色系の色と模様を施す技法。鹿革に型紙を重ね、上からへらでのりを置いて防染し、いぶし終わったところでのりを剥がし取ることで模様が白く浮き出る。漆置き技法よりも古い歴史を持つ。現在生産量は少ないが、その独特な風合いは根強い人気を誇っている。



漆置き

漆置きは印伝の最も代表的な技法。染め上げた鹿革の上に型紙を載せて漆を刷り込み、立体的な模様を付けていく。均一に漆を刷り込むには熟練の技が必要。職人が使うへらは自然にくぼみができ、職人の手にフィットしていく。漆は、時とともに色がさえ、深みのある光沢を帯びる。

印伝業界発展のために

甲府印伝商工業協同組合は、業界として甲州印伝の普及・啓発、品質向上を含めた土台づくりを目標に昭和49年に発足し、現在4業者が加盟しています。業界をより良くしていくためには、個々の業者がそれぞれの特色を持ちながらも、同じ方向性の中で情報の共有化などをしていく必要があります。4業者という小さな規模だからこそ、意思の疎通が図りやすいといった利点もあり、印伝業界発展のための機能を果たしています。

(株)印傳屋 上原勇七

甲府市川田町アリア201/TEL.055-220-1660

(有)池田商店

甲府市青葉町9-13/TEL.055-233-7866

甲府印伝商工業協同組合

中里印伝製造所

甲府市青沼2-19-17/TEL.055-233-0580

(有)印傳の山本

甲府市朝気3-8-4/TEL.055-233-1942



甲府印伝商工業協同組合

事務局長 上原 重樹さん

印傳博物館



印伝の模様「うろこ」が施された
郷土力士・竜電関の化粧まわし

2018年大相撲初場所、郷土力士としては30年ぶりとなる新入幕を果たした竜電関(甲府市出身)。後援会から贈られた化粧まわしには印伝が使用されている。黒地に白い漆を施した模様は、竜電のしこ名にちなんで「竜のうろこ」をイメージしている。うろこ柄には魔よけ、身を守り成長するといった意味がある。



江戸時代以前から昭和前期に至る古典作品の展示や、印伝の技法の紹介など日本の鹿革工芸文化を公開。貴重な収蔵品から職人の息遣いや、使い手の愛着を感じながら、伝統の技と美を堪能することができる。趣向を凝らした年4回の企画展も開催している。

住 所 / 甲府市中央3-11-15 印傳屋上原勇七本店2階

T E L / 055-220-1621

開館時間 / 10:00~17:00

休 館 日 / 展示替え期間中・本店休業日

ご来館の際は、あらかじめお問い合わせください。

入 館 料 / 一般200円、小・中学生100円

印傳博物館 検索

【企画展】 3月4日(日)まで開催中
甲州印傳と伊勢型紙 — 精緻な模様 —

印伝を

老舗が守る伝統と、挑み続ける革新

世界へ。

江戸時代に遠祖・上原勇七が創案し、
代々家長に伝承されてきた印伝の技法。
山梨の地場産業として根付いた印伝は
今では海外へも進出。
伝統を守りながらも常に時代を見据え、
進化の歩みを止めない老舗、
印傳屋の挑戦と想いを
上原重樹社長に伺いました。

INDEN EST.1582 RIPPLE(リップル)

鹿革を黒く染めた地色に、白い更紗と黒漆で織りなす幾何学模様。
印伝の伝統模様「市松」より派生したデザインは海外での人気が高い。
日本国内では直営店のみで取り扱っている。
NY チェーンショルダー(右) / NY クロスビーC(左)





上原 重樹 さん

株式会社 印傳屋 上原勇七 代表取締役社長

株式会社 印傳屋 上原勇七
 (本店)甲府市中央3-11-15/TEL.055-233-1100



新作を発表することは、
 印伝の進化に欠かせない

「昭和58年頃からは洋装にも合わせやすいオリジナル柄の開発を始めました。印伝は鹿革と漆という素材自体を変えるわけにはいきません。ですから色、模様、デザインといったもので魅力を深め、時代のニーズに応えながら可能性を広げていく必要があるのです。常に新しいものをお客さまに提案する年一回の新作発表には苦勞があります。企業の力をアピールできるチャンスにもなります」

伝統産業を担う
 企業として貫くプライド

印傳屋は海外のハイブランドとのコラボレーションも手掛けていますが、そこには老舗企業として絶対に譲れない信念があります。

「当社は相手が世界的な有名ブランドであっても、素材の提供のみはせず、あくまでも対等な立場で一緒に作っていくという姿勢を貫いています。それはお互いを尊敬し合い、良いものを作ろうというところへ結び付くからです。このようなコラボレーションの実現は、現場の活性化や技術力の向上、また印伝の知名度アップにもつながっていきます」

山梨から海外へ、
 印伝の魅力を発信

「平成23年、アメリカに進出した時、現地では誰も印伝を知りませんでした。そこで海外のお客さま向けの商品を開発し、展示会への出展を続けながら印伝を知っていただく努力を重ねた結果、全米最大規模のファッション展示会『コナリー展』で注目を集めるようになりました。今ではアメリカの代理店と契約し、現地で販売するまでになりました。西洋で漆は『Japan』と表記されます。まさに日本文化を象徴する素材というわけです。今後も動画をインターネットで公開するなど、印伝の伝統文化をより広く世

界に向けて発信していきたいと思っています」

伝統と革新。
 時代が求めるものを感じ取る

「当社の創業は今から400年以上前の天正10年。これほど長く続いてきたのは、その時代時代の家長が、今どういうものをお客さまに提供すべきか常に考えてきたからだと思います。短期的な流行ではなく、時代が求めるものを感じ取り革新を続けてきたのです。伝統は先祖から預かった財産です。しかし、単に伝統を守るだけでは生き残ることはできません。時代の変化を見極め進化していくこと、それが伝統産業にとって大切なことだと思っています」

2017年新作
 ETORCE (エトルス)
 緑のつなかりや円満を表す七宝つなぎ模様を
 更紗と漆で立体的に表現。
 ボタニカルシルエットを浮かび上げらせる
 新たな手法が美しい表情を見せている。
 リュック(右) / ポシェット(左)





URUSHI
NASHIKA
MADE in YAMANASHI



新しい印伝を探求する若き伝統工芸士の挑戦

印伝は誇り。

近年、ニホンジカの著しい増加により
森林環境への影響や農作物への被害が全国各地で深刻化する中、
山梨県では駆除したニホンジカの有効活用策として
印伝の素材に用いる計画をスタート。
山梨県産業技術センターが開発した
環境負荷の少ない、なめし技術により
皮本来の色を生かした純白の印伝用鹿革が実現。
県の取り組みに賛同した山本裕輔さんの技が加わり
「URUSHINASHIKA (ウルシナシカ)」が生まれました。

「URUSHINASHIKA」は漆、鹿、山梨の3つのキーワードを組み合わせ名付けられた。





色鮮やかな黄色やブルーの印伝は、父の代から作り続けている

印伝は私にとって 一番好きなもの

山本さんは「印傳の山本」の3代目。平成12年から家業に入り、経済産業大臣指定伝統的工芸品 甲州印伝の伝統工芸士の資格を取得したばかりの若き職人です。

「私が中学生の時、父が日本でただ一人の伝統工芸士になりました。認定の盾を見た時、『伝統工芸士』という職業に憧れを抱き、この業界に入ることを意識し始めました。当時の私は『士』が付く職業に格好良さを感じたんです。印伝の製品は生まれた時からいつも身近にあり、小・中学生のころの筆箱も、もちろん印伝でした。印伝に囲まれて育った私にとって印伝は、一番好きなものなんです」

「白」をベースカラーとした印伝 その斬新な取り組みに共感して

「環境保護のために駆除したニホンジカの皮を、環境に優しいなめし方で加工し、有効活用していく山梨県の取り組みに共感し、山梨県産業技術センターとともに2年ほどの試行錯誤を経て、県産皮革による製品『URUSHINA SHIKA』を開発しました。新しい始まりをイメージする『白』をベースカラーとし、これまでの印伝にはなかった細密な模様の表現にも挑戦しました。カムフラージュ柄には、県の花・フジザクラや県の鳥・ウグイス、山梨県の形が隠れています。今回のような、いつ、どこかの山で捕獲した鹿で、誰が作ったものか、といったトレースビリティが分かる製品作りは、私の理想とするところですよ。

また、人気キャラクターやゲーム関係、絵本の主人公などのコラボレーションにも取り組んでいます。それによって若いお客さまに印伝を手にとってもらえる機会が増えてきました。私と同世代の方たちと、印伝を通してコミュニケーションが生まれることがとてもうれしいです」

伝統工芸士として考える 後進の育成

「私は山梨を印伝の産地として守り、さらに発展させていきたいと思っています。そのために

は、伝統工芸士として後進を育成し、いずれは独立して会社を立ち上げるまでになってほしいと考えています。私が技術を教えた人が成長し、その人らしい印伝を世に出していく、そして私も負けずに切磋琢磨して作り続ける。そうやってお互いが高め合っていくことで、今までたどり着けなかった境地まで行けるのではないかと思っています。誰もが知る『印伝山梨』、そこを生きているうちに見ることが私の今後の目標です」



山本 裕輔さん

有限会社 印傳の山本 甲州印伝の伝統工芸士

有限会社 印傳の山本
甲府市朝気3-8-4 / TEL.055-233-1942





地元産の食材と、印伝風の化粧箱。 山梨の歴史文化を兼ね備えた銘菓。

金精軒製菓株式会社

代表取締役 小野 光一 さん

日本百名山の一つ甲斐駒ヶ岳の麓、名水の里として知られる北杜市白州町の甲州街道台ヶ原宿。古き良き宿場町の風情が残るこの地に、「金精軒」があります。明治35年創業、和菓子の老舗の新作「甲州金饅頭」には、山梨の魅力が満載です。

武田信玄の築いた「甲州金」の歴史を 今に伝える菓子作り

『甲州金饅頭』は、甲府を盛り立てようという思いを持つ、甲府市出身者らでつくる会『首都圏甲府会』から依頼を受け、手掛けることになったものです。戦国時代に信玄が広めた甲州金の貨幣制度は江戸幕府にも採用されたといわれているもので、信玄の偉功の一つです。その甲州金の歴史を全国の皆さまに知っていただき、山梨を発信していこう、そんな思いを込め、お菓子の開発が始まりました。当社では創業当時から地産地消を本分にしていますので、『甲州金饅頭』を作るに当たっても地元の食材を使うことと、山梨の歴史文化を感じられるようにしました。

食材の吟味、そして 印伝風の化粧箱で重厚感を出す

「皮は、金が映えるように身延町の竹炭を加え黒くし、清里高原の牛乳でミルクィな風味をプラスしました。竹炭には、余分なにおいを吸収し、さらし、しっかりとした食感を生む保湿効果や、抗菌効果も

あるといえます。餡は、黄金色になるように、北杜市産のサツマイモ・あけの金時で作った芋餡にしました。そして、仕上げは甲州金をイメージさせるために、金箔をあしらいました。また、パッケージは、文字や絵柄などを浮き彫りにする加工法で印伝風とし、取っ手をおいて使いたくなるような化粧箱としました。地元食材の生産者さん、印伝の職人さん、そして当社の和菓子職人の技が一つとなり生まれた『甲州金饅頭』。おいしさを味わっていただき、山梨の魅力を感じてほしいと思います」

台ヶ原 金精軒

北杜市白州町台ヶ原2211
TEL.0551-35-2246
営業時間：9:00～18:00
定休日：木曜日



Information

かつての旅籠屋である建物は、甲州街道台ヶ原宿の歴史を今に伝えるたずまい。店内には地産地消にこだわり、丹精込めて手作りした和菓子が並ぶ。



甲州金饅頭と、富士山や武田菱などをモチーフとした印伝風の化粧箱



地元の天然素材から 生まれる 革小物の世界

工房 1m(大月市)
革製品作家
藤本 二菜さん

藤本二菜さんは大月市富浜町の出身。革製品を創作する仕事に就きたいと東京に出て、経験を積んだ後、32歳の時に地元へUターン。3年前に工房兼店舗「1m(ルーメン)」をオープンしました。

ブランド「郡内レザー」を立ち上げ、山梨県東部・桂川流域の郡内地方(主に大月市、都留市、上野原市、北都留郡、南都留郡)で環境保護のために駆除された鹿やイノシシの革を使用した製品を作っています。

「地元に戻ってきてから、地域のことをもっと知りたいと思い、いろいろ調べてみました。その中で、駆除した鹿やイノシシの皮をなめしてくれる業者が都内にあること、獣皮を産地に戻して使うという仕組みがあることを知りました。しかし、この地域では、駆除した鹿やイノシシの皮を商品として使うという認識はほとんどありませんでした。それでも、自分も猟や解体の現場に関わってみたいという思いから、狩猟免許を取得し、地元の猟友会の皆さんと一緒に山に入るようになりました。その結果、猟師さんとも気持ちが通じ合うよ

— 山梨への移住相談はこちらへ —
やまなし暮らし支援センター

専門相談員が常駐し、山梨への移住や就職について、ワンストップでお手伝い。移住セミナーや各種イベントも開催しています。

■やまなし暮らしセミナー

自治体職員や相談員による地域情報の提供や個別相談などを行います。

3/10(土) 富士北麓・東部地域セミナー NPOふるさと回帰支援センター

3/23(金) 都留市CCRCセミナー…………… NPOふるさと回帰支援センター

4/14(土) 山梨県就農セミナー…………… NPOふるさと回帰支援センター

東京都千代田区有楽町2-10-1

東京交通会館8F NPOふるさと回帰支援センター内

TEL.03-6273-4306 FAX.03-6273-4307

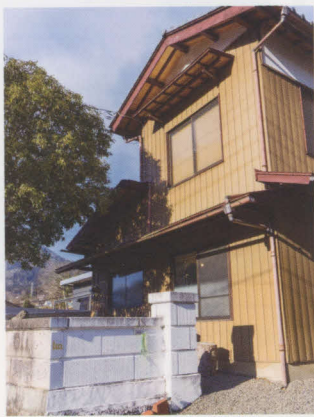
E-mail:yamanashi@furusatokaiki.net

利用時間：火～日曜日 10:00～18:00

やまなし暮らし 検索



二菜さんの製品やセレクトしたこだわりの雑貨などが並ぶ店内。製品には郡内のローマ字表記の「g」から鹿の角が生えているロゴマークが付いている。Im(ルーメン)は電気の明るさを表すものです。使ってくれる方の気持ちが少しでも明るくなってほしいという思いから名付けました」と二菜さん。



工房Im (ルーメン)

大月市富浜町鳥沢947-4
 TEL.0554-56-7097
 営業時間：11:00～19:00
 定休日：日曜日・火曜日



うになり、今では皆さま方に応援していただき、こうして創作活動を行うことができています」

100%植物性のタンニンによる製法でなめされた、人にも自然にも優しい品質の革で作った製品を、地元郡内にちなみ「郡内レザー」と名付けました。

「天然素材ですから傷もありますが、それも野生動物が厳しい自然環境の中で生きた証です。一つとして同じものはなく、使い込むほどに風合いも深まり愛着が生まれてきます。そんな魅力ある『郡内レザー』に触れていただき、郡内地方の素晴らしさを知ってほしいという思いを込めて作っています」

二菜さんはずっと地元は何もない所だと思っていて、その魅力に気付いていなかったといいます。

「でも、今なら分かります。ここは、人、モノ、自然、何でもある素晴らしい所です。山梨には400年以上もの歴史を持つ「革工芸」があります。その業界でも若手職人さんが情熱を持ってものづくりをしています。今後はそういった分野のクリエイターの皆さんともつながりを持ち、創作活動を続けていきたいです」

金手駅付近を通る旧甲州街道には、
 城下町特有の鍵の手状のクランクがあり、
 この鍵の手が、金手(かねんて)の名の由来とされています。
 江戸時代、多くの旅人たちがこの地を行き交い、
 町は栄え、印伝の文化も広まっていきました。
 そんな歴史の風情を感じながら、甲府の城下町をてくてくと…。

街道の駅からの小さな旅
 てくてくてくてくてくてくて
甲斐の国
 くに



01

甲斐奈神社

甲斐奈通りに面した階段を上ると、新しく改築された拝殿が迎えてくれる。境内には、健康守護社、商売繁盛社、諸願成就社などいくつもの末社がある。



02

nohono

のほのほ

横近習町通りを歩き交う人たちを眺めながらランチが楽しめるお店。店主が丁寧にごはんは、優しい味わい。



03

甲府
カトリック教会

大正時代に建てられた教会は、建築物としての魅力もある。聖堂内部には6体の聖像があり、人々の心よりどころ、祈りの場として常に開放されている。



04

地域の歴史を
伝える案内板

古い地名と当時の町並みの地図に解説を添えた案内板が、道端にある。古い地名からその地の歴史に思いをはせれば、散歩にも一層の風情が感じられる。



05

横近習大神宮

よこきんじゆ

毎年2月3日には、柳町大神宮とともに節分祭が行われる。江戸時代から続くこのお祭りは「大神さん」と呼ばれ親しまれている。春には境内の桜も美しい。



06

印傳屋
上原勇七
本店

天正10(1582)年創業。遠祖・上原勇七が、鹿革に漆で模様を付ける技法を創案した。この辺りは甲府城下の入り口として、江戸時代から繁栄していた。



07

印傳博物館

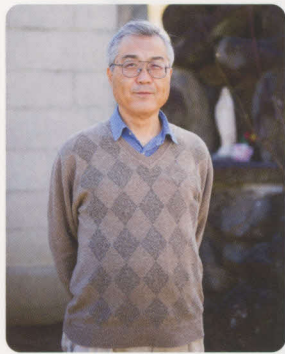
印傳屋本店の2階にある博物館は、印伝の歴史や技法を伝える資料や、貴重な作品を数多く收藏・展示している。印伝の文化と魅力を深く知ることができる。



08

五味醤油

創業明治元年の老舗。米こうじと麦こうじを合わせて造る甲州みそは山梨特有のもの。昔ながらの製法にこだわり、丹精込めて手作りしたみそは、滋味豊かな味わい。



てくてく
歩きの
途中で...

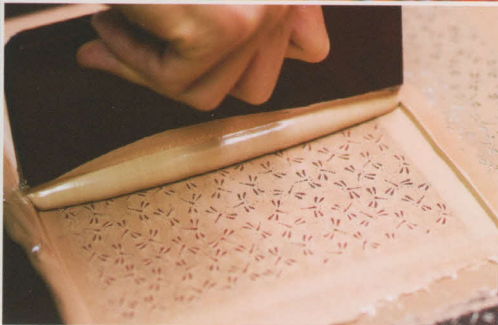
甲府カトリック教会でお会いした司祭の白木信一さんは「この辺りは外国籍の方も多く、いつでもお祈りができるように聖堂は24時間開放しています。誰でも自由にお入りいただけますので、この地を訪れた方にも教会に触れ、静かなひとときを過ごしていただけたらと思っています」と優しく語ってくれました。

吉祥の願いを模様に入れて。

古来から親しまれていた古典柄は吉祥の意味合いも持つ。
厄よけとして武具などにも用いられてきたといわれる「亀甲」、
平穏な暮らしが続くことを願う「青海波」、
商売繁昌の意味を持つ「ひょうたん」、勝虫かちむしとも呼ばれ勝負事に縁起が良い「とんぼ」、
繁栄・長寿の「花唐草」など、
自然界や四季の美しさを感じ取る
日本人の美意識を象徴する模様が印伝の伝統に寄り添い続けてきた。

(右上から時計回りに)
花唐草／爪唐草／紗綾形／ぶどう／青海波
亀甲／波うろこ／とんぼ／小桜／ひょうたん





山梨へは中央線の特急列車でどうぞ!

便利で快適な特急「あずさ」・「スーパーあずさ」・「かいじ」

主な停車駅



特急列車のご予約は「えきねっと」で!



詳しくはホームページをご覧ください。

えきねっと 検索

www.eki-net.com

- パソコン・スマホからラクラク簡単予約!
- 指定席が発売開始日のさらに1週間前から事前受付OK!
- 指定席券売機でスムーズにお受取り!

※一部の列車や一部の区間は「えきねっと」でお取扱いしておりません。

※乗車日の1ヶ月+1週間前から指定席を事前に申し込むことができます。実際の発売手配は乗車日1ヶ月前の午前10時からとなります。

※満席等の理由により、座席をご用意できない場合があります。※運転日や運転時刻、停車駅などは事前にご確認ください。

※掲載内容は2018年1月現在の情報です。ご利用の際はホームページなどで最新情報をご確認ください。※路線図や写真はイメージです。



山梨 てくてく *teku-teku* VOL.10 | 2018 SPRING

平成30年2月1日[季刊]
第10巻春号

山梨県広聴広報課 発行 〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1
TEL. 055-223-1339 FAX. 055-223-1525 制作 山梨日日新聞社



やまなし森の印刷紙
この印刷紙には、
FSC® 森林管理認証を
取得した山梨県有林からの
木材が使用されています。

山梨県